
世の道理に気付いたのは異世界の中だった

鉄昆虫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世の道理に気付いたのは異世界の中だった

【Nコード】

N6076V

【作者名】

鉄昆虫

【あらすじ】

何となく世の中や大人に反抗したくなる年頃の少年、佐原研ことケン。

彼はある日、ギジの世界と呼ばれる異世界にやってきてしまう。

襲い掛かるT，Tと呼ばれるロボット兵士……。

通常の間人より遥かに高い戦闘力を持つ人間、B，E……。

少年はその世界でどのような成長をしていくのか？

第一話

目覚まし時計がジリジリとけたたましい音を鳴らす。一度寝返りを打ってから起き上がると、時計の頭にあるスイッチを押してそれを止める。

「さて、今日もくだらない1日の始まりだ」

その少年、“佐原研”はそんなことを思って身なりを整えると、1人キッチンに向かい簡単な朝食を作り始める。

その音で起きたのか、寝室からかれの母親が眠たそうな顔をしながら現れた。

「今日は早いよね？」

「今日“も”だよ」

研はフライパンの上で音をたてている目玉焼きの火加減を見ながら母親に言う。そして、炊飯器が炊き上がりのブザーを鳴らすと、それが合図であったかのようにコンロの火を止めて1枚の皿に目玉焼きを盛り付ける。その後、炊飯器のふたを開けてしゃもじを使い、中の炊き上がった白米をほぐした。

研の母親はそんな研の行動をニコニコしながら見ている。ここ最近、母親よりも研の方が早く起きて朝食を作ることが多かったのだ。

「最近はしっかりしてきたわね」

母親のその言葉に、研は何てことも無いような顔をしながら「そうかい」と無愛想な返事をする。母親はそんな研の態度を褒められて照れているのかと思った。

だが実際のところは、早く起きないと色々とうるさく怒鳴られる為に嫌々やっていることなのだ。故に彼の返事は無愛想なものとなる。もっとも研の母親はそんなことに気付かないで相変わらずニコニコしていたが……。

そして、研が朝食を先に食べ始めた時だ。母親が口を開く。

「そういえばいい加減に部活とか始めたら？」

その一言に研は嘆息する。

「入ってるよ、料理同好会」

研が返答すると母親の顔が曇り始めた。それを見た研は、また母親のくだらない戯言が始まると内心で悪態をつく。

「月に1度しか活動してないじゃない」

「調理実習室はそんなにホイホイ借りられないんだよ」

「なら空いた時間に何かほかの部活と兼任しなさいよ。野球部とかサッカー部とか……」

「運動は苦手なの知ってるだろ？」

そもそもやる気が無い、というのを研は内心で付け足した。例えば兼任したところで、やる気が無いものをやったところで何の意味も無いというのが彼の持論である。

更に言ってしまうと、この母親は運動部以外は部活では無いと内心では考えている節があり、そんな母親を研は視野も考え方も狭いと思ひ輕蔑していた。

それに研は料理同好会自体に入っていることについても良く思っていない。それにもかかわらず入っている理由は、何も入る部活が無いと思っていた時に友人に誘われたからである。

しかし、その料理同好会……。当然ながら入っているのは女子だらけで、研とその友人はかなり浮いた存在となっていた。そして、友人はその女子だらけ同好会に嫌気が差したのかすぐに辞めてしまった。しかし研は元来、真面目なところが一度入ったからには途中で辞めるわけにはいかないと思ひ、そのままダラダラと1年近くも続ける羽目になってしまったのだ。

そして、今の同好会内における佐原研という人間は体の良いパシリである。具体的にいえば調理実習室の使用申請や、活動に関する連絡、資料集めといったことだ。もっともそのことに関しては特に文句は無く、それらのことを黙々とこなしていた。

「ちよっと聞いているの？ あんた、来年は中学3年で受験生なのよ

？」

母親が甲高い声で言う。いつの間にやら説教モードに入っており、研はその甲高いキィキィというような声を不快に感じて顔をしかめた。

「その受験に受かった先の高校でやる勉強が将来の役に立つなら、もう少し真剣になるさ」

研が皮肉を込めて答えると、そのまま鞆を引っ掴み玄関に向かう。その後ろで母親が甲高い声で何かを言うが、研は気にすることも無くドアを開けて外に出て行ってしまった。

やりたくない部活やら、受験やら、実にくだらないと研は思う。そんなことに何の意味があるのだろうか？ そんな事より社会に出たときにすぐに使えるようなスキルを身に付けられる教育を行うべきである。その方が社会においても即戦力となる人材になれるのに、まったく持って大人というものはやたらと回りくどいことや意味の無いことを好むものだ。

そんな事を考えながらいつものように通い慣れた通学路を歩く。

「おはよう」

不意に後ろから声をかけられる。それは同じ料理同好会の女子であつた。

「おはようさん」

「ねえ、実習室の使用申請出してくれた？」

その言葉に研は少々がっかりする。別にこの女子に何か特別な感情を抱いていた訳では無いが、話しかけてきた理由が調理実習室の使用申請についてという、事務的なことであつたからだ。

「ああ、出したよ。先生から連絡が行く手はずになつてる」

研はのがっかりした気分を飲みこんで答える。その顔はひどく無愛想なものであり、見る人によっては暗い性格に見えるだろう。

「そうなんだ。ありがとうね」

そんな研をどう思ったかは分からないが、女子はそれだけ言うと研の前方にいた女子のグループに混じって行った。

“ あいつってさ、暗いよねー”

その女子のグループを見た研は、そんな陰口を叩かれていたの思
い出す。

「何でこんなくだらない事してるんだろ」

誰に言うでもなくつぶやく。そして何気なく横を向けば、通学途
中にいつも通りかかる電気屋の見本商品として置かれている大型テ
レビが能天気なニュースを流していた。

「ではこれから最近に見られたUFOのビデオ映像をお見せします」
どうやらオカルト特集のようだ。もう、そんな時期だったかと思
い苦笑する。

「本当にくだらないんだな」

その時だ。首筋に何かが刺されるような痛みを感じる。

「痛っ」

何かと思い振り向くも、見えるのは同じ制服の学生が眠そうな顔
をして歩いている姿だけだった。

気のせいかと思い、再びテレビに目をやると画面の左上に表示さ
れている現在の時刻が8時15分であることを示していた。

「やべー！」

研は走り出す。研の通ってる中学は8時20分までに着かないと
遅刻扱いになるのだ。

第二話

暖かった全身が急激に冷える。それと同時に手足に自分の意識が行き渡り、全身の感覚が覚醒した。

息を吸い込み、酸素を体に取り込んでフツと吐き出す。今まで動かなかった手の指を動かすと何か冷たくて硬いものに触れた。

目を開ければ、強烈な光で視界が真っ白になる。思わず「うっ」と唸り声をあげ、手をかざした。

10、9、8、7……。何故かは分からないが数字をカウントする。それと同時に真っ白な視界が薄れ始め、徐々に周囲の景色が見え始めてきた。

6、5、4……。腰を動かし上半身を起こす。3、2、1……。

ゼロ。そんな声が頭に響き渡ったと同時に。完全に意識が覚醒して記憶が頭の中にビデオの早送りを見ているかのように流れてきた。その記憶は佐原研のものである。

「うわっ！」

そこで始めて自分が異常な状況の中にいることを理解した。

何が異常かといえば、自分が全く見知らぬ町の中にいたのだ。そして辺りを見回してみても人の姿が見えない。というよりも、人の気配がしないのだ。

しかも、その町はまるで戦争でもあったかのようにボロボロになっていた。アスファルトの地面は砕け、あらゆる建物はその全身にひび割れがあり、ガラスは割られ、果ては倒壊しているものさえある。

「何だここ？」

記憶を辿れば、確かに自分は学校に向かう途中だったはずなのだ。それなのに何故こんなところに倒れていたのか？

自分は夢を見ているかとも思うが、空気に触れている肌の感覚や、淀みの無い意識が、これが現実であることを告げていた。

「誰かいませんかー！」

とりあえず、大きな声で叫んでみる。……が、返事は返ってこない。それも当然かもしれない。そもそもこの辺りの風景を見る限りは、人の気配どころか、ここ数年、あるいは数十年は人が立ち入っていないような状態なのだ。

「何なんだよ一体……」

そう呟き、膝を折ってしゃがみこむ。二進も三進もいかないとはこの事だ。

その時である。背後からガシャガシャという音が一定のリズムで聞こえてきた。それは人間の歩く足音にそっくりなものだ。

「人！」

それを人だと思い歓喜の声をあげる。そして、立ち上がって振り返るが、そこにいたのは人でなかった。

「人、じゃない？」

それは確かに人の形をしていたが、まるで骸骨の様に細く、銀色に輝く金属の棒と板で構成されていた人型だった。

つまりはロボットである。

右手には銃のようなものが握られ、のっぺりとした頭の中央にある一つ目が輝く。そして、右腕が上げられ銃口を向けられた。

「うわ！」

その行動が敵対的なものであること直感が告げ、反射的にその場から飛びのく。それと同時にある。ロボットの銃口が光り、足元のアスファルトが焼かれて赤く光り黒煙をあげたのだ。

「何なんだ一体！」

叫んで走り出す。それに合わせるようにロボットもガシャガシャという音を立てて追いかけて来る。時折、レーザーの様な光が体のすぐ横をかすめた。その度にチリチリという熱と命の危険を感じて背筋がヒヤリとなる。

走りながら、様々な感情や疑念が渦を巻く。

ここは何処なのか？ なぜ自分はこのにいるのか？ あのロボットは何なのか？ なぜ襲ってくるのか？

「こんな訳の分からない所で死ぬるかよ！」

そう思い、必死に走るも徐々に距離は詰められ、ロボットの放ったレーザーが頬をかすめる。その余熱を感じ、もっと早く走ろうとするも、足は思い通りに動いてくれない。

そのうちに足がもつれて前のめりに倒れる。

「うわっ！」

倒れた体を何とか起こして振り向けば、先ほどのロボットがすぐ後ろでこちらを見下ろしていた。

“もう駄目だ！”

そう思いロボットを見上げる。レーザー銃がこちらに向けられ、その黒くて小さい穴である銃口が見えた。

そのロボットの挙動がビデオのスロー再生の様にゆっくりに見え、いよいよ自分は死ぬと覚悟を決めたときである。

ジュツ、という音と共にレーザー銃を握っているロボットの右腕が赤熱して吹き飛んだのだ。

ロボットは頭を左側に向ける。

次の瞬間、今度はロボットの胴体が赤熱する。そして再びジュツという音がして赤熱した胴体が爆ぜ、残った四肢がバラバラと地面に落ちた。

それはほとんど一瞬の出来事である。

「大丈夫か？」

ロボットを倒したと思われる人間にそう声をかけられて、初めて何が起こったかを理解した。

「おーい」

再び声をかけられて、その声の主に振り向く。

それは女だった。

年齢は10代後半から20代前半、見た目は……、

「兵隊？」

思わず声が出る。

その女は、ポケットがいくつもあるタクティカルジャケットの様

な物を着込み、腰に巻きつけたウエストポーチには明らかに手榴弾と思われる物がぶら下げられていた。

そして、その手には先ほどのロボットと似たような形の銃のようなものが握られているのだ。

「うん？」

女は黒い瞳をこちらに向ける。

「おい、ユリちゃん！」

この女とは別の、気の抜けたような女の声が聞こえた。目の前の女はそれに反応して声の方向を向き、大きく手を振る。

「こっちだ！」

どうやらこの女は“ユリ”と呼ばれているらしい。

「その子は？」

気の抜けた声の女はユリと呼ばれる女のもとに来てからこちらを一瞥してユリにたずねた。

「分からない、さっきからこんな感じなんだ」

2人の視線が刺さる。

「さては初心者だねー？」

気の抜けた声の女がフフンといった感じで言う。

「初心者？」

喉の奥から声を絞り出す。その様子を見ていたユリが「ああ…」と何か納得したような声を出してうなづく。

「なあ、この子……」

ユリは気の抜けた声の女に何かを尋ねようとした。それに対して「分かってるよー」と、相変わらず気の抜けたような声で答えるもう1人の女。

「立てる？」

もう1人の女はこちらを向くと、そう言って手を差し出した。その手を掴んで立ち上がると女はにっこりと笑顔を見せる。

「ようこそ、“ギジの世界”へ！」

“ギジの世界”？

それはまったく聞いたことの無い単語だ。言葉だけで判断するなら、今、自分がいるこの場所のことなのだろうか……。

「私は“水野美玖”。ミクでいいよー」

気の抜けた声の女が名乗る。おそらくこちらの警戒心を解くためだろう。それに続いて先ほどのロボットから助けてくれた女もこちらを向いて言う。

「私は“白河由理”だ。ユリ…、でいい」

先に名乗った水野美玖はニコニコとしていたが、この白川由紀と名乗った女はどこか表情が硬い。

2人の表情があまりにも正反対なのが面白いと思ったが、相手が自分の名前を名乗ったのならこちらも名乗り返さなければという思いがその面白いというのを打ち消す。

「俺は、佐原研です」

それを聞いたミクは「ふーん」という声を出す。そして一息ついて言った。

「じゃあケンちゃんだねー。よろしく！」

いきなり下の名前で、しかも“ちゃん”付けで呼ばれたことにケンは啞然とする。

「とりあえず、そろそろここから離れないか？ この子にも事情を話す必要があるし」

ユキが先ほど倒したロボットを一瞥した後に言った。それに対してミクはうなずき銃のようなものを構える。

今更になってケンはユリとクミが同じ様な、つまりは兵隊か何かのような格好をしていることに気付く。

それに対して自分はごく普通の学生服だった。所謂学ランである。その服装の違いは、ケンが今までいた世界と今いるこの場所が全く違う世界であることを明確に表していた。

もっとも、その事にケンが気付くのは2人に連れられて向かった先でのことになるのだが……。

第三話

ケンは自分が置かれている状況を把握するために、まったく見知らぬ人間であるミクとユリの2人に着いていくことにした。

進んでいくごとに、今までいた廃墟の様な町並みは徐々に建物の数を減らし、その代わりに自然が増えていく。

アスファルトの道路を草花が隠し、時折見られる建物には巨大な木が絡みついていて、その光景はあまりにも常識から離れていて、不安や好奇心といったものがケンの中に芽生えていく。

「一体ここは何なんですか？」

そのケンの質問にミクは困ったような顔をする。

「村に着いたら話すよ」

“村”？

村がある事を知り、ケンはわずかに安堵した。村があるということとはある程度の人間が存在するからである。

それから30分程歩き、いい加減に周りの景色に飽き飽きし始めたときだ。

「あれだよ」

ミクがそう言うと言を差す。

見れば、ミクの差した先には丸太などで作られたと思われる城壁の様なものが見えた。

「あれが村？」

ケンはそう言って目を凝らして見ると、所々に物見台の様な物が城壁の上部にあり、そこには数人の人影が見える。

縄文時代とか弥生時代の村のイラストを歴史の教科書で見たことがあるが、それにそっくりだと思いフンと笑う。

今まで見てきたロボットの兵隊に、そのロボットと彼女たちが持っていたレーザー銃。それらのSFじみたものと、この村でギャップが強かったからだ。

「町にいけばアイツらが襲ってくる。だから私たちはこんな辺鄙なところで村を造ることになったの。そう考えれば、こんな弥生時代みたいな村になるのも仕方ないんだよね」

そのミクの言葉にケンはギクリとした。まるで自分の考えていることが分かったかのような物言いだったからである。

しかも、この村を弥生時代のものであるという感想をピンポイントで言葉にしたのだ。

「まあ、なんにせよ人がたくさんいるのは安心しますよ」

ケンは自分のそんな動揺を悟られまいと思い、適当な言葉を口にする。

「とにかく皆にこのことも話さなくちゃ」

ミクとケンの、そんなやりとりを特に気にすることもなくユリが言った。2人は是非も無いと、その言葉に同意して首を縦に振った。

そして、3人は村の入り口に着く。入り口は全長5メートルはありそうな木製の門によって閉ざされており、その門の前には門番である2人の女が、やはりミクやユリの様な格好でレーザー銃を持って立っていた。

「お帰りなさい」

門番の1人が声をかける。中年の女だった。

「ただいまー」

ミクがそれに返答する。

「あの……、その人は？」

ケンを訝し気な目で見ながら、もう1人の門番の女が尋ねた。こっちはケンとさほど年齢が変わらないであろう女だ。グレーの縁の眼鏡をかけている。

「うん、まだこの世界に来たばかりの初心者だよ」

そんなミクの返答に門番2人は「ふーん」と相変わらず訝し気な目でケンを見る。すると中年女の方の門番が何かに気付いたように声をあげた。

「この子……！」

「分かってますよ。だからこれから村長に会いに行こうと思って」
「そうね。それがいいわ」

その2人のやりとりの意味が分からずケンはいけた顔でミクと中年女の2人を見る。その隣でユリが嘆息した。

「どういうことです？」

ケンはユリに尋ねる。

「すぐに分かるさ」

ユリはケンの顔を見ないで答えた。

ケンはそれらの態度を見てある事を直感する。つまり、この場における自分の存在は異端であり、腫れ物のようなものではないかということだ。

勿論これは確証ではないのだが、彼女らの態度は、ケンがいた料理同好会の女子がケンにとった態度と酷似していた。

何を聞いても曖昧な答えに愛想笑い、訝しむ様な顔。それは自分たちの輪の中に異端の存在が入ってきた時に人が見せる特有の態度である。

それをケンは不愉快に思った。こういうハッキリしない態度ほど不愉快なものはない。異端なら異端とはっきりと言って、叩き出してくれた方がよほどスッキリするというのが彼の思いである。

そんなケンのしかめっ面を見たユリは何を思ったのか、諭すように声をかけた。

「大丈夫だ。いきなりこんなところに来たら誰だって不安になる」

そのあまりにも唐突なユリの言葉にケンは思わず「へ？」と間抜けな声を出す。

「え？」

そのケンの返答にユリも同じような声を出した。

「早く行くよー」

「あ、待って！」

2人は先に進んでいたミクの後を追う。そして、いよいよ村の中に入った。それはユリやミクにとっては見慣れた光景だが、ケンに

とっては初めての光景であり、「へえ」と感嘆の声を漏らす。

その村は外だけでなく中も弥生時代の村のようであったからだ。木材や石材を組み合わせて作られたのであろう掘っ立て小屋に櫓。そして畑や田んぼが所々に見られ、そこで作物が作られていることが分かる。

また、村の中央には井戸があり、そこが村の主な水場となってい
るらしく井戸の周りには食器や洗濯物などの洗い場が設けられて、
その周りで談笑する村人が見られた。

ケンは何故あの男達は四肢の一部が無いのか尋ね
ることに気付く。

「どうかした？」

ミクが尋ねる。ケンは何故あの男達は四肢の一部が無いのか尋ね
返しそうになったが、先ほどのロボットを思い出して、その疑問を
口に出さずに押し止めた。

おそらく彼らはあのロボットにやられたのだろう。

「いや、普通の服だと思って」

ケンはいい加減な事を口にした。それを見て何を思ったかミクは
クスクスと笑ってみせる。

「そりゃあそうでしょう。もしかして村の人たちも昔の人みたいな
格好をしていると思った？」

「少しだけ……」

ケンは白いシャツにジーンズを履いている男に目をやりながら答
える。その答えにミクは相変わらずクスクスと笑い、ユリは嘆息し
た。そして、3人は再び歩き出す。

「あそこだよー」

しばらく村の中を進んでユリが言って指を差した。

「あれか……」

そこに見えたのは3階建てのコンクリート製のビルであり、この
村の中で唯一近代的な建物だった。

しかし、近代的なものといっても建物そのものは、先ほどの廃墟

の町のように、表面はヒビ割れ、窓ガラスは外されており、廃墟の町と似たような雰囲気だとケンと思う。

そのまま建物の中に入ると、外見と同じような感じでボロボロであり、窓からの光のみで明かりが取られているらしく薄暗かった。

「何だか陰気な場所ですね」

何気なくそう呟いたケンにミクは苦笑する。

「まあ、ここは倉庫みたいなものだからねー」

そう言われてケンは通りかかった部屋を覗き込む。そこには確かにごちゃごちゃと木箱やらプラスチックのケースやらが置かれていた。

「ここだよー」

「あ、はい」

ミクに呼びかけられて、ケンは部屋を覗くのを止めて隣の部屋に入る。

その部屋には乱雑に木材を組み合わせて作られてた机が中央に配置され、その右側に似たようなベッドがあり、壁にはホワイトボードがかけられている。そして、そのホワイトボードや部屋の壁にメモ書きと思われる小さい紙が貼り付けられていたり、机の上には書類が散乱していた。

その部屋には中年の男と青年の男の2人がいて、机を前後に挟む配置で何かを話している。

「やあ、戻ったか」

その部屋の机の前に座っていた中年の男が、それまでもう1人の男と話しながら、眺めていた机の上にある書類から目を離して言う。「無事だったか？」

若い方の男はそうミクに尋ねた。ミクは首を縦に振って返答する。ケンはその男がミクと同じくらいの年齢であることに気付く。

しかし、それ以上に目を引くものがこの男にはあった。

それは、本来ならあるはずの左腕が明らかに無いのと、鮮やかな青い瞳である。

左腕が無いことは何となく分かる。大方、先ほどのロボットにでも襲われたのだろう。しかし、その鮮やか過ぎる青い瞳は全く説明がつかない。

カラーコンタクトの類かとも思ったが、通常のカラコンタクトは黒い瞳の上に被せるように使うため、どうしてもコンタクトレンズの下黒目が透けてしまうのだ。

しかしこの男の瞳は黒目そのまま青く染まっているかのように見える。

「この少年は？」

中年の男がミクに尋ねた。

「あ、どうも」

その中年の男と目が合い挨拶するケン。それを男は訝しむような目で見える。その隣で青い瞳の男は軽くケンに会釈をした。

「ええ、ついさっきこっちに来た初心者です」

男の質問に答えたのはユリだった。

「まだ右も左も分からないからここで説明しちゃおうと思いましたがそれに続けてミクが言う。青い瞳の男はだろうなと言う様な顔で首を縦に振ってミクに視線を向ける。

「この人が村長？」

ケンは中年の男に視線を向けながらユリに小声で尋ねた。

「ああ、そうだ」

ユリもケンに合わせるような小声で答える。その間にミクはこの村長に事情を説明していた。

「君、名前は？」

村長がケンに声をかける。突然だったのでケンは「え？」と思わず聞き返す。名前を聞かれたことに気付いたのはややあってからだ。

「佐原ケンです」

「ケンちゃんですね」

ケンが返答し、その上にミクが言葉を被せる様に言う。

ケンは、ミクが勝手に自分を“ちゃん”付けて呼んだことに対して

子ども扱いしていると思い、顔をしかめる。村長はその2人の顔を一瞬見比べたが、気にするでもなく口を開いた。

「まあ、まずはこの世界について説明しよう」

村長の言葉を聴き、ケンでは自分がここへ来た目的。つまり、自分が現在置かれている状況を知るためにここへ来たことを思い出す。

自分が全く知らない状況、そこにケンは不安と期待のようなものを感じずにはいられなかった。

第四話

村長はケンを一瞥してから、一度咳払いをした。どこから説明したら良いかと考えたからである。

「そうだな……。ここは“ギジの世界”と呼ばれる……。まあ分かりやすく言えば異世界だよ」

異世界？

「何ですって？」

そのあまりに唐突な話にケンは思わず聞き返す。

「君が驚くのも無理は無い。しかし、事実だ」

その言葉の言う通り、ケンは実際にそうとしか説明が出来ない体験をしていた。いきなり、自分が知らない場所にやってきたことや、先程のロボットである。

「どうして、我々や君がこの世界に来たのか、そもそもこのギジの世界とは何なのかについてはいまいち分かっていない」

「説明するって言うっておきながら分からないんですか？」

ケンはそのまま思ったことを口にした。村長やクミはそれに苦笑する。

「まあ、ここがSF小説で言うところの平行世界とか、タイムスリップしてやってきた未来の日本とかって説はあるんだけどねー。まあ、私たちはその道の学者じゃないから分からないんだよ」

ミクのその言葉にケンは「そういうものか」と小声で呟く。

「なににせよ、ここは異世界ということが分かればそれで良いんじゃないか」

そう言ったのは青い瞳を持つ青年だった。

「自己紹介が遅れたな。志村恭平だ」

「どうも」

「話を続けて良いかな？」

村長が言って、2人は頷く。

「さて、ここが異世界なのは言った通りなのだが……、この世界には大きな存在が3つある」

「3つ？」

「1つが人間だ。外の世界からここへやってきた我々のことだな」
外の世界？ 何のことかとケンは思ったが、すぐにそれが佐原研という人間が存在していた、元の世界であることに思い当たる。

どうやら、このギジの世界では元の世界のことを外の世界と呼んでいるらしい。ケンはそう理解する。

「2つめが“T，T”と呼ばれる存在だ」

「T，T？」

ケンは、また知らない単語が出てきたと思い、その単語を聞き返す。世界が違うのは分かるが、何でもかんでも名前を付けなければいいものじゃないだろうと、呆れに近いようなものを感じた。

「テラー・トルーパーの略だそうだ」

「さっきのロボット達だねー」

村長の言葉に続けてミクが言う。

「そんな大層な名前付けなくてもロボット兵だけで良いのでは？」

ケンは思ったことをそのまま口に出して言った。それを見た村長は、あまりにもハッキリと物を言うケンに苦笑する。

若いな……。

村長と志村はケンを見て同じ事を思った。

自分が思った事や感じた事を、そのまま口に出して言えるのは若さゆえの特権なのかもしれない。

人は年齢を重ねるに連れて、社会という檻の中で生きていくことになる。その中では、感情に任せた発言は自分の身を滅ぼすことになるのだ。

しかし、まだ社会のことを何も知らない若者といのは感情のままに行動する。今のケンはまさにそれだった。

そして志村が口を開く。

「どの世界にも何でも名前を付けたがる奴はいるものさ。恐怖の兵

隊なんて言い得て妙だと思わないか？」

志村の言葉にケンは一瞬「はあ」と返す。

「まあ、とにかくだ。あのT，Tは人間に対して見境なく攻撃を仕掛けてくる。いわば、この世界における“敵”だ」

「敵、ですか」

「何故人間を襲うのか、奴等はどこから来たのか、そもそもT，Tなんてものを作ったのは誰か、その辺りはよく分からないがな」

つまり、T，Tとは人間を襲うロボットであり、それ以上のことは分からないということだ。

「調べましょうよ……」

村長の説明をいい加減だと思い、ケンは分からないことがあれば調べるというごく当たり前のことを指摘する。

「そうしたいのはヤマヤマだが、この世界じゃ1日を生きるだけで手一杯になる。そんな余裕は無いんだよ」

志村がそう言って嘆息する。それに合わせてミクが「アハハ……」と力なく笑った。

村長の説明をいい加減だと思い、ケンは分からないことがあれば調べるというごく当たり前のことを指摘する。

「でも、分かっていることもある」

そう口を挟んだのは先ほどからケン達の会話に加わらないで眺めていたユリである。

もつと言え、会話に加わらなかったのではなく、会話の波に乗れなかったというのが正確なところだ。

「分かっていること？」

そんなユリにケンが聞き返す。そのことで、ユリはようやく自分も会話の波に乗れたと安堵した。

「T，Tは主に町を中心に活動しているんだ」

「町？」

聞き返したケンにユリが答える。

「ケンちゃんが最初にいた所だよ。私たちは廃墟って呼んでるけど」

ねー」

答えたユリの跡にミクが口を挟んだ。

「最初にいた場所……」

ケンとは自分が一番最初にいた町を思い出す。誰もおらず、風化した様な建物がいくつも並ぶ不気味な場所だった。

そこは確かに廃墟と呼ぶに相応しい。

「そう、T・Tはその廃墟を中心に活動している。だから私たちはこんなところに村を作って暮らしているんだ」

そのミクの言葉で、ケンはこの村の作られた理由を理解した。

廃墟といえど町は町なのだ。1から村を作るよりかは先ほどの廃墟を利用したほうが明らかに生活は楽になる。

しかし、この村の人間はそれを行わなかった。

その最大の理由が、廃墟をT・Tが徘徊しており、常に人間を狙っているからなのだ。

「もっとも、その廃墟にいるT・Tを殲滅して新しく町を作ったところもあるらしいがな？」

志村が言った。

「ここ以外にも人がいるんですか？」

ケンは若干驚いた様子で尋ねる。

「ああ、いるさ。結構な数が」

何て事の無いといった風に志村が答える。

「少なくともこの世界は10年以上前から存在してるって話だ」

「いや、12年以上前だ」

志村の言葉を村長が訂正した。それを見た志村が肩をすくめる。

「少なくとも私は12年以上この世界で暮らしている」

そう言って村長はフンと見様によつては自慢げにも見える鼻息をした。

「ちなみに私はまだこの世界に来て3ヶ月だ」

「私とキヨウは2年位かなー？」

ユリが言って、ミクも後に続く。

ちなみにミクが言ったキョウというのは志村のことらしい。ミクの言葉の後に志村が頷いたことからケンはその判断した。

「何だか話を聞いていると、みんな外の世界から来たような感じがすね?」

ユリとミクの言葉を聞いてケンが言う。

「どうかこの世界出身の人なんていないんじゃない?」

それに答えたのはミクだ。

「少なくとも私は聞いたことが無いな。この世界で生まれた子供も、親は外の世界から来た人間だ」

村長が補足する。

「おそらく、この世界に最初から存在するのはT、Tと廃墟の町くらしいのもんだろう」

志村が言った。

それらを聞いたケンは半ば呆れた。

普通に考えて異世界へ来てしまうなんて事を経験する人間などはまずいない。例え、いたとしてもごく僅かなものだとかケンは考えていたからだ。

しかし、志村や村長の話を聞く限りでは結構な数の人間がこの世界に來ているらしい。

「そんな空想物語みたいな事を経験する人がホイホイいるなんて思いたくないですね」

「だが、そんな人間がホイホイいるのがこの世界さ」

ケンの言った言葉に志村がニヤリと笑って返答した。

「ま、何かの物語の登場人物になったと考えようや」

こういう発言をポジティブと言うのだろうか? 一瞬、ケンは考える。

「あー、話が十分ずれたが。もう1つのことを話しても良いかな?」
村長がそう言って、ケンはこの世界には3つの大きな存在があるという話を思い出した。

つまりそれは人間とT、T以外に、もう1つ大きな存在がこの世

界に存在するということだ。

「お願いします」

ケンがそう言った時、志村が顔を伏せて特徴的な青い瞳が揺れるのが見えた。

第五話

村長は「うむ」と言っただけ咳払いをする。

「もう1つの存在とは、“B，E”……。ブルーアイズの略だ」

ブルーアイズ。つまりは青い瞳のことである。

それを聞いたケンはずいぶん志村を見た。志村はその青い瞳でケンを見つめ返して頷く。

「そう、志村君がそのB、Eだ。そして、君もな」

「はい？」

何を言われているのか分からなかった。そんなケンを見てミクが「はい」と言っただけ小さな手鏡を渡した。

覗きこむケン。

「うわ！」

そこに映っていたのは確かに見慣れた自分の顔である。毎朝、顔を洗うときに必ず目に入る左右反転した自分の顔。

しかし、それとケンが持っている手鏡に映った自分の顔には決定的な違いがあった。

「眼が青い？」

そう、そこに移った自分の顔にある眼。その瞳が志村と同じように青く染まっていたのである。

例えるなら空の色か海の色といったところか？

「どうしてこんな？」

ケンは鏡の中の自分の瞳を見ながら尋ねた。

「さあね。ただ、この世界に来る人間の中にはそういう奴が、ごく稀にいるんだ」

そう答えたのは志村である。そして一度嘆息した後、村長に言った。

「やはり、俺が説明します。B，Eの説明なら同じB，Eの俺のが詳しい」

「そうか。そうだな……。」

村長は志村を見ながら答える。

「まあ見ての通り、B，Eってのは俺やお前みたいに青い瞳を持つ人間のことだ。さっきも言ったが、この世界にやってきた人間の中でも稀な存在だな」

その言葉を聞き、異世界へ行くというだけでも稀有なことなのに、自分はその中でもごく稀な存在であるとケンには理解した。そして、自分はどれだけ運が良いのかと思う。

「つまりはラッキーな訳ですかね？」

「どうかな？」

何となしに言ったケンに志村が意味深に答えた。

「確かに眼が青いだけならそうかもしれないが、実際はだいぶ違うな」

その志村の言葉を聞き、ケンは心の中に疑問符を浮かべる。

「俺たち、B，Eは普通の人間には無い力があるんだ」

「力？」

志村は頷く。

「B，Eは特定の条件下になると五感が異常に鋭くなり、周りを認識する力が高くなるんだ。そして、それに合わせるように身体能力も高くなる……。簡単に言えば火事場の底力を引き出す事が出来るわけだな」

「例えるならスーパー何とか人みたいな感じですかね？」

「そういう例えなら3倍何とか拳のが近いな」

「成程」

2人の例えの意味が分からずにミクとユリは顔を見合わせた。村長は村長で、ちゃんと説明できているのかと不安げに2人を見る。

「そんな事より、問題はB，Eの立場だ。これは覚えてもらわないと大変な事になる」

その言葉で場の雰囲気が一瞬で変わった。ミクは顔を苦々しげな顔をして村長を見る。それは睨み付けている様でもあった。

ミクは視線をどこかに泳がせている。気まずそうだ。

「立場？」

志村の言うB，Eの立場と、この場の気まずい雰囲気は何だと思
いながらケンは何も尋ねた。

「人間っていうのは、自分が持っていない物を持っている奴を羨ん
だり妬んだりする奴が多いってことだ」

村長はその言葉を聞いて、胸が締め付けられる様な気持ちになる。
その言葉は村長の、この村に対する皮肉でもあったのだ。

未だに不思議そうな顔をしているケンを見て志村は言葉を続ける。
「さっき言った様に俺たちB，Eの戦闘力は高い。そして、その力
がT，Tに対してだけのものなら何ら問題は無いが……、残念な事
にこの力は人間に対しても有効だ」

それを聞いてケンは志村の言いたい事を何となく理解する。

「この力を悪用する奴もいると？」

ケンがそう言うのと志村は頷く。

「そういう奴もいる」

志村はそう言って間を置いた。

「そうなれば、普通の人間は当然B，Eを恐れる。いつ自分たちが
襲われるか分からないから……？　だが、確かにB，Eの力は強
いが所詮は同じ人間だ。数で押せば普通の人間でもB，Eを倒すこ
とは出来る。そして、B，Eの数は普通の人間より遥かに少ない。
これがどういう事かは分かるな？」

その問いかけにケンは思考を巡らせる。持つ者を恐れる持たざる
者……。そんな言葉が頭に浮かび、ケンはある結論を導き出す。

「つまり、俺たちB，Eは厄介者って訳ですか？」

「まあ、そんなところか？　場所によってはB，Eってだけで襲い
掛かってくる集落もあるらしいが……」

志村はそう言って肩をすくめて見せる。

B，Eといっても同じ人間なんじゃないのか？　そんな考えがケ
ンの脳裏をよぎる。B，Eと普通の人間の違い……。ケンはその事

を身をもって体験していないからだ。

「ちなみに、この村もそれは同じだ」

その瞬間、村長の顔がこわばった。志村はそれを一瞥して皮肉っぽく笑う。

ケンはこの村の門番である中年女の自分を見た時の反応や、村長の自分に対する態度を思い出し、この村もB，Eに対して偏見の様なものを持っていることを理解する。

「まさか、ここから出て行けなんて言わないですよね？」

ユリが訴えかけるような顔で言った。

「それは無いな。ですよね？ 村長？」

志村が即答する。

「うむ……。彼を追い出すつもりは無い。この村に置いて良いと思う」

意外な答えである。志村の話を聞く限りでは追い出されるかとケンは思っていたからだ。

村長の言葉にユリもホッと胸を撫で下ろす。せっかく助けたのに、ここで追い出されたとあれば、助けた意味が無くなってしまう。

「そうですか……」

ユリがそう言うと、ミクが「よかったね」と言いながらユリの肩を叩いた。

「B，Eは外敵に対しては有効な戦力になるから、ですよね？」

志村は臆することなく村長に問いかけた。村長の顔が曇る。

「そういう事ですか」

ケンは、危険だと言われたB，Eである自分をこの村に置くといった村長の言葉に納得して言った。

これに納得がいかなかったのはユリである。

「待ってください！ 彼はまだここに来たばかりなんですよ？ しかも、まだ子供じゃないですか！」

ユリが思わず声を荒げて言う。それに対して村長は口の中で何やらモゴモゴと、言葉にならない声を出していた。

ユリが言うことはもつともなのだが、この世界では人が集まる集落を襲う外敵も少なくない。そうしたものに對する戦力としてB，Eを村を守る観点からは是非とも確保しておきたかったのだ。

確かに志村もB，Eであるのだが、彼は左腕を失っている事もあり、戦力として見たらかなり不安がある。

だが、この佐原ケンという少年は五体満足であり、しかもこの世界に着たばかりなのだ。

もし、この村の人間として受け入れれば、報酬とか生活の為でなく、この村の人間として純粹にこの村を守ってくれるだろう。

しかし、それも志村やユリの発言で雲行きが怪しくなってきた。今、この佐原ケンという少年は疑いのまなざしを向けている。

村長はそう思って頭を抱えた。それも、過去にこの村がB，Eである志村にしてきた仕打ちのせいかと思うと、村長はやりきれない気持ちで一杯になる。

そんな村長を見ていた志村は「困らせるのもこの辺にしておくか」と思い口を開く。

「ま、いきなり戦わせるようなことはしないさ。ユリの言うとおり彼はまだ子供だ」

そう言って村長に視線を向けた。

「ああ、もちろんその通りだ」

村長はやつと志村の嫌がらせから解放されたと安堵しながら言う。ちなみに、このときのケンは自分がこの村に置かれれば戦闘に出されるとかよりも、自分が子供扱いされていることに腹を立てていた。

「まあ、一番は彼自身がどうしたいかだけだな？」

今度はケンに視線を向けて志村が言った。

そうなのだ。村長や志村が言った、この村にケンを置くというのはあくまでケンに對する提案であり、強制では無い。

それを決めるのはケン自身である。

「ケンちゃん、どうする？」

ミクが尋ねる。

ケンの答えは決まっていた。……が、その前に自分を子供扱いするのは止めて欲しいと言おうとする。

「んー？」

そんなケンを見ていたミクが声を出した。それを聞き、ケンはこの場でそんなことを言う方がよっぽど子供ではないかと思い直し、当初の質問の答えを口にする。

「まだ、この世界の事とか全然分かりませんから、しばらくの間はこの村に置いて貰おうと思います」

その言葉を聞いて志村が頷く。村長は安堵したのかフウと息を吐いた。ユリはどこか納得できないのか不満気な顔でケンを見る。それに気付いたケンはそんなミクを一瞥するが、そのミクの表情を何とも思わずに視線をそらした。

“ギジの世界”、“T，T”、“B，E”……。

全く分からないことだらけだが、しばらくはこの世界で暮らしていけば少しは分かるだろう。そして、それから自分の行動を決めればいいのだ。

ケンはそう考えて、この村に住むことを決めた。

第六話

ギジの世界と呼ばれる異世界。何時から存在するのか、そもそもここはどういった世界なのか、その全てが謎の世界。

そこに住む人々は、ある日突然この世界にやってきたという。

そこには、T、Tという人間を襲うロボットが存在しており、人々はその脅威に怯えつつも、何とか対抗しながら生活をしていた。

そして、高い戦闘力を持つ人間B、E。

彼らはその戦闘力ゆえに時には人々から恐れられ、時にはT、Tに対抗するための戦力として迎え入れられていた。

何もかもが違うこの世界であるが人間というのは不思議なもので、そこに動物や植物などがあれば、それらを食糧や道具として利用することで生きていくことができるのである。

その内に人々はT、Tから武器を奪って、これに対抗するようになり、T、Tが徘徊している廃墟の町から物資をかき集めて生活の糧にしていた。

「人間、生きていこうと思えばどこでも生きられるもんだ」
とは志村の談である。

*

そんな世界のとある村にケンが生活するようになって2週間が経過した。

その2週間の間にケンはこの村の特徴のようなものを理解する。

まず、この村は女の発言力が強い。理由としては、男の人数が少ないからである。そして、その少ない男達も五体満足な者は少ない。当然ながら、それはT、Tとの戦闘のせいである。

戦いは男のするものというのはどこの世界でも同じなようで、このギジの世界、ひいてはこの村でも戦闘は男が優先して行っていた。その結果として、ある者は戦死し、ある者は負傷で戦えない体になる。そのうちに男の人数は減り、女が戦闘に駆り出される事になった。

それにより、徐々に村の女衆の発言力が強まって今に至るのである。

次の特徴は、この村はB，Eを異常に恐れている。正確に言えば嫌悪しているといった方が正しい。

それもそのはずで、この村はかつてB，Eに襲われたことがあるのだ。その時のB，Eは文字通りに寝首をかいて倒したらしいが、その時の事もあってか、この村の住人はB，Eを快く思っていない。その後に志村とミクはこの村にやって来たのだが、普通の人間のミクはともかくB，Eの志村は住人から嫌がらせのような仕打ちを受けていたのだ。

だが、その嫌がらせも、この村にやってきた賊を志村が退治してからは一切無くなり、彼らは村の住人として受け入れられることになる。

もつとも、その戦闘で志村は左腕を失い、まともに戦えなくなっただけでも彼が村に受け入れられた理由の1つでもあったのだが……。

「気に入りませんね、そういうの」

それらの話を聞いたケンが言った。

「だろうよ。だが、仕方ないっちゃあ仕方ないのさ」

そう言って志村は自分が受けた嫌がらせをしみじみと思い出す。

「仕方ない？」

ケンは作業をしていた手を止める。

「それだけこの世界が荒んでいってことさ」

志村は嘆息して言った。それを聞いて黙り込むケン。そういうものだろうか。志村の話に疑いを持つ。

「おーい、手が止まってるぞー」

志村に言われて「おっと」と声を出すと再びケンはや作業を開始した。ジャガイモの皮むきである。2人は料理当番なのだ。

その時である。厨房の出入り口の方からドタドタという音が聞こえてきた。

「やっほー」

間の抜けた声。水野ミクである。

「おかえり」

志村が鍋を見ながら手を振って返答した。鍋の中には野菜と鶏肉のスープがグツグツと煮込まれている。材料は全てこの村で作られたものだ。

「美味しそうだねー」

ミクは鍋を覗き込む。

「味付けはケンがやった」

志村が言うときケンは「フン」と笑い、皮を剥き終わったジャガイモをざるの中に放り込んだ。

「料理同好会に入ってたんで」

ケンが言った。

「結構、お前の料理は評判良いよ」

「キョウは料理苦手だもんね」

「無理言うなよ。こちらら片手しかないんだ」

そんな志村とミクのやりとりを見ながら、ケンは料理同好会に入っていて良かったと思う。

ケンの料理は、確かに村の中で評判が良かった。現にこの2週間でケンは村の料理当番を、よく任せられるようになっていたのだ。これも全て、元の世界で料理同好会に入っていたおかげである。

どうでもいいものの変なところで役立つものだ。

「欲を言えば、もっとマトモな調味料が欲しいですね」

そう言うとケンはあまり物が置かれていない調理棚を一瞥する。

「それは……、難しいかな」

ミクが答える。

「この近くの廃墟は既に物資を取り尽くして、何も無いからな」

そう言ったのは志村だ。それを聞いたケンミクはミクを見る。ミクはタクティカルジャケットにレーザーライフルを抱えていた。

彼女は先程、その何も無い廃墟の探索から帰ってたばかりである。

「その割には定期的に廃墟に行ってますね？」

ケンはずまみ食いをしようとしていたミクの腕を払いのけながら尋ねた。

「ああ、俺たちの使っている武器は元々T、Tの物を奪ったものなんだ」

志村が答えて竈の火を止める。

「そのせいもあって、俺達ではこれらの武器を修理することが出来なくてな。定期的に奴らを倒してその武器を奪わないといけないんだよ」

つまり、敵を倒す為の武器を奪う為に敵を倒しに行くという事だ。全くもって妙な話だとケンは思う。

「後は牽制の意味合いがあるな」

「牽制？」

「そうだ。定期的に俺達が廃墟に行けば、奴らは廃墟を警戒してそこから動かなくなる。そうなれば、奴らがこの村を襲ってくる可能性が減る訳だ」

志村がそう説明する。

「T、Tって、たまーに廃墟の外へ移動して、人間の集落を襲ってくることもあるからねー」

ミクが言った。チラチラとケンと志村が作った料理に視線を向ける。それを見た志村が半ば呆れながら、「もう少しだから待て」と言う。

「厄介な話ですね」

ケンが言った。

「全くだよ」

志村が同意する。

「その厄介の相手をしてきたんだから、そろそろ食事にしてくれないかなー？」

ミクが待ちきれないとばかりに、厨房をウロウロと歩きながら言った。それを見たし裏とケンの2人は顔を合わせてため息をついた。「ああ、じゃあ皆を呼んでください」

ケンが呆れた声で答える。

「やったあ！」

ミクは指を鳴らして1人で喝采した。そのまま勢いよく厨房から出て行く。食事の時間の住人を呼びに向かったのだ。

「志村さん、何であの人と付き合っているんです？」

ケンが尋ねた。

そう、志村恭平と水野ミクは恋人同士なのだ。

だが、しっかりと落ちて着いている志村に対して、ミクはおっとりしていて能天気であり、2人の性格は正反対なのだ。

それで2年以上も付き合う、というよりお互いにこの世界で生きていくために背中を預けあっていたというのがケンには信じられなかった。

「いや、あれでいてミクはしたたかなところがあるからな。まあ、

何と云うか腹黒だよ。頼りにはなるけどな」

志村はミクが出て行った方向を見ながら答えた。

「腹黒ですか？」

ケンは疑いの眼差しで志村を見る。ケンは、ミクがいつも間の抜けた声で「あははー」とか笑っているような人間にしか見えないからだ。

しっかりとするというのなら、まだ自分を助けてくれた白川ユリのがしっかりとしているように思えた。

「誰が腹黒なのかなー？」

厨房の出入り口からミクが顔を覗かせながら言った。

「ぎゃあ！」

2人は驚いて叫び声を上げた。どうやら、ミクはまだ厨房の出入

り口付近にいたようだ。

第七話

事件が起きたのはそれから数日が経った時だ。その日のケンはず事が特に無いので、村の中を意味も無くフラフラしていた時に起きた。

村の住人が慌てた様子で走っていくのを見て、「何だ？」とケンもそれに着いていく。

「何かあったんですか？」

ケンはざわざわと話し声をあげる人だかりの中にいる男に尋ねた「ああ、田崎の奴が死んだらしい……」

「死んだ？」

田崎というのはこの村の男である。それも、この村では珍しい戦闘が十分に出来る男であり、実戦慣れしたベテランであった。

ケンもその名前は知っており、何度か会話をしたこともある。もっとも、事務的な会話であり、お互いに同じ村の住人という程度の関係であったが。

人だかりの中心には泣き崩れている眼鏡の少女と、その少女の背中をさすって慰める中年の女が見える。

その2人はケンが初めて村に入る時に出会った門番2人であった。少女の方の名前は“吉岡真帆”。年齢は16歳と、この村の中では最もケンに近い歳である。

ただ、関係に關しては戦死した田崎とさほど変わらず、やはりお互いに名前を知っているだけであった。

もっと言えば、前述した通りにケンからしてみれば吉岡の名前を知っている程度なのだが、吉岡はケンの事をB，Eとして警戒していた為、吉岡側からすれば良好な人間関係とは言い難いだろう。

では、ケンと最も良好な人間関係を築いていた村の住人は誰かというと、それは同じB，Eの志村恭平と、その恋人である水野ミク、ケンを助けた張本人である白河ユリである。

一応、この村の村長もケンのことを悪く思っていないようだが、B、Eは警戒するという村の特性から、複雑な心境らしい。

「また、女共の発言力が強くなるな……」

「田崎の奴が、クソッ！」

「真帆ちゃんをかばって、何とかここまで来たらしい。あいつらしいよ」

村の住人は口々に言う。

ケンは泣き崩れる吉岡の近くで倒れている人影を見止めた。それは田崎の亡骸である。

「私のせいだ……」

吉岡が泣きながら、そんな言葉を繰り返す。ケンはその吉岡の近くに倒れている田崎の亡骸を見ようと近寄って行った。

すると、いきなり誰かに後ろから手で目隠しをされる。

「見ないほうがいい」

それはユリの声だった。そういうものかとケンは思っ、自分の目を覆うユリの手をどかして振り向く。

「いや、見といたほうがいいと思うよ？」

ユリの更に後ろからミクが現れて言った。どうやら洗濯の途中だったらしく、大量の衣類が詰め込まれていたカゴを両手で抱えている。

ミクは「よっ」といいながらかごを下ろして、自分を見ているケンの肩越しに田崎の亡骸を一瞥した。

「ケンちゃんも見といたほうが良いよ。T、Tに殺されたらどうなるか、それと人が死ぬってというのはどういことかを知るためにもね」

「それは……」

何かを言いかけるユリ。ミクは右手の人差し指を立ててユリの額を小突く。

「ユリちゃんのいけないところ。そうやって、嫌なものから眼を逸らそうとする。この世界で生き残りたかったら、人の死から眼を逸

らさないことだよ？」

その言葉に黙り込むユリ。

「生き残る為、ですか……」

ケンはその咄いて田崎の亡骸に眼をやった。全身をレーザーで焼かれているのか、あちこちが炭化しているかのように黒く焼け爛れている。そして臭いだ。肉を焦がしたような鼻をつく臭いに思わず顔をしかめる。

成程、これでは見ないほうが良いと言いたくもなるな、とケンは思った。

「私たちもこうなるかもしれない。覚えておいたほうが良いよ？」
ミクが後ろから声をかける。

「いつもと口調が違いますよ」

ここになって、ケンはミクがいつものような気の抜けるような声で無く、どこか人を突き放すような冷たい声であることに気付いた。

「ほら、私って演技派だからねー」

ケンの一言を聞いてミクはいつものような間の抜けた声に戻す。

その落差にケンはユリが二面性のある人間であることを感じた。

＊

その夜、村長の部屋。

部屋には村長と志村がいた。机の上に置かれた蠟燭の炎だけが2人の姿を照らす。

「女衆はケンを戦闘要員に加えたがっています、か……」
志村が言う。

「どの道、田崎君の穴埋めは必要になる」

沈痛な面持ちで村長が言った。その様子を見る限り、14歳の子供を戦闘に出すことにはやはり抵抗があるようだ。

おそらく、ケンを戦闘に出すと言い出したであろう女衆は中年の世代だ。若い人間を戦闘に出して、自分たちは歳をとりすぎたと言いついて安全な村に籠っている。全く不愉快な連中だと志村は齒噛みしながら言う。

「もっと先に死ぬべき人間はいると思いますがね」

「私だって済まないと思うよ」

「でしょうね」

村長はどちらかといえばケンに対して好意的である。しかし、村の人間……、特にこの村の過半数を占める女衆はケンに対して懐疑的なのだ。それも、過去にこの村で暴虐の限りを尽くしていたというB，Eのせいだろう。

確かにその人物もケンも同じB，Eではあるが、全く違う人間である。

「カテゴリばかりを見て、その個人を見ようとしない、か……」

志村は嘆息して言った。村長も同じように嘆息する。

「とりあえずは分かりました。ただ、戦い方は俺が教えますよ?」

そう言って志村は立ち上がる。ミクはともかくユリは怒るだろうなと思った。

「頼むよ」

村長はそう言って部屋から出て行く志村を送り出した。

そして、次の日になってケンが戦闘要員に加える事が本人たちに知らされることになる。

第八話

ケンを戦闘要員に加えるという話が本人に伝わった後、志村はすぐにケンの訓練を始めることにした。

村の住民の一部は、これをB、E同士で何か企んでいるんじゃないのかと疑う者もいたが、村長が何とかこれを諫めたおかげで表面上では何事も起こらずに済んだ。これには志村も肩書きだけとはいえ、流石に村長だと見直した。

しかし、訓練といっても志村は職業軍人という訳では無いので、ケンに教えられることといったら武器の使い方ぐらいのものなのである。

そんな訳で、肝心の訓練の内容も村の裏にある山で放し飼いにされている鶏やら鹿やらを相手に、銃を命中させるための練習を行う程度のものであった。

「狙いを付ける時はなるべく落ち着くんのだ」

レーザーライフルを構えるケンの後ろで志村が言う。

「当たれ！」

ケンはそう呟いてトリガーを引く。ライフルの銃口が輝いてレーザーが発射される、が狙いは外れて、獲物である鹿とは明後日の方向に命中する。

鹿は当然逃げ出してしまい、山の本々の中に姿を隠してしまった。

「うまくいきませんねえ……」

ケンが呟く。

「当たらないと晩飯は抜きだぞ。これは食材調達もかねてるんだ」「ぐへー」と声を出すケン。そして、再び獲物を探して歩き出す。

ちなみに、どうして鹿狩りなのかといえば、この裏山には多数の鹿が生息しているからである。

どうしてこうなったかは分からないが、どうやらこの裏山は鹿の生息に適しているらしく、天敵もせいぜい食料調達のために狩りに

来る人間くらいのもので、この裏山の鹿の個体数は非常に多いのだ。

そんなこともあってかケン達が住んでいる村の主なタンパク源は鹿肉となる。

余談だが、鹿の肉は臭みが無く淡泊な味の牛肉といった感じだ。

「お、もう一匹出てきたぞ」

志村が茂みの中いる鹿を見つけて言った。

ケンはその言葉に反応して、即座に獲物に狙いをつける。その時に一瞬だが、鹿の動きが止まったように見えた。人差し指でトリガーを引く。

「当たるな」

ケンの直感がそう告げた。次の瞬間にはその通りに、レーザーが鹿のわき腹を直撃する。

断末魔の泣き声をあげて倒れる鹿。

「やったな、初めての命中だ」

志村がケンの肩を叩いて言った。

「ですね」

そう言ってケンは構えていたレーザーライフルを下げる。撃たれた鹿は倒れて動かない。

先程まで確かに動き回っていたのだ。それは、先程まで生きていたことになる。

しかし、ケンがトリガーを引いて発射したレーザーが、その鹿の命を奪った。

それは一瞬の出来事である。

「あまり気分の良いものじゃないですね」
倒れた鹿の死体を見ながら言った。

「そう思うか？」

志村が鹿の死体に近寄りながら答える。

「見る。上物だ」

その言葉を聞いてケンは嘆息した。この人は殺された鹿がスーパ

1の特売品か何かとしか思っていないのかと憤慨する。

それを見た志村は苦笑しながら言った。

「ま、何かを殺す事に抵抗があるのは当たり前だろうがな。生き物ってのはそうやって生きていくんだ。せいぜい殺したものを無駄にしないことだな」

「食物連鎖？」

そりゃそうなんだけども、とケンはどう思っているのかを呟く。

確かに人間、というよりも生き物全般は大なり小なり他の生物を食することで生命行動を維持している。

しかし、だからといって自分の手で他の生物の命を奪うという行為にケンは抵抗があった。

それが、単なる訓練の一環とあれば尚更である。こんな簡単に他の生物の命を奪って良いのだろうか？ 今のケンには生きていくためには仕方ない事と理解しつつも納得できずにいた。

「ああ、そういうえば」

鹿狩りを兼ねた戦闘訓練。その言葉でケンは1つの事を思い出した。

「俺たちB、Eには特殊な“力”があるって言ってましたよね？」

「ああ……」

志村は顔をしかめて答える。

「それってどういうものなんです？ どうやったら使えるようになるんです？」

以前、ケンは志村からB、Eには特殊な力があることを聞いていた。それは、常人よりも遥かに高い戦闘能力を得られるという事らしいが、ケンはその使い方どころか、力自体がどういったものかも詳しくは知らないのである。

「それは以前言った通りだ。戦闘中の認識力や五感が鋭くなって、それに合わせて身体能力が高くなるといったところだ」

「それじゃ以前に聞いたのと変わりないですよ」

やれやれと思いつつケンが言った。それを見た志村がため息を

つく。

「仕方ない、じゃあ実際に見せてやる」

「見せる？」

「その方が分かりやすいだろ？ それにお前もB，Eだ。やはり一度見ておいたほうが良い。今後の為にも、な」

志村はそう言うとは一度深呼吸をして眼を閉じた。それを見たケンは一体どういうことだという疑問と、志村が見せると言ったB，Eの力がどういふものかという期待が心に沸き上がる。

「はっ……！」

志村は息を吐く。

次の瞬間、ケンにとっては不思議な事が起こった。志村の眼が青く光り、その全身に青白く光る幾何学模様が浮かび上がったのだ。それは見様によっては電子回路のようにも見える。

ケンは自分の目を疑った。

「驚いたか？ B，Eは力を発動させている時はこんな風になるんだ」

志村が振り返って言う。その動きに反応するように全身の模様に光が奔った。

「そして……」

そう言って志村は腰を落として身構える。そして次の瞬間、志村の姿が消えた。

否。

彼は正面に生えている立ち木に跳躍していたのだ。消えたように見えたのは、そのスピードが尋常じゃなかったからである。

志村はそのまま立ち木に跳躍からの飛び蹴り。そのまま蹴った反動で後方の立ち木に跳躍。空中で姿勢を変えてその立ち木に飛び蹴り。先ほどと同じ要領で蹴った反動を使い近くの立ち木に跳躍。

それを何度も繰り返し、志村は一度も地に足を付けずに立ち木から立ち木へ飛び移っていく。

それらの動きは、通常の人間を遥かに上回る反応速度で体を動か

すことが出来て、尚且つ筋力も通常の人間のそれを上回っていないければ成し得ない動作だった。

立ち木から立ち木を飛び回り、全身から出る青白い光が残光を残す。

その光景は現実と非現実の境目の様でもあった。というのも、動きそのものは確かに早いのだが、普通に眼で追いかけることが出来る速さなのだ。

全身の発光はともかく、動きそのものは努力次第で普通の人間でも出来てしまうように思えてくる。もちろん、実際には出来ないであろうことは頭では理解していたが……。

「それでも凄いな」

ケンが呟く。それと同時に目の前に青白い光が文字通りに落ちて来た。

「ふう……」

それは志村だった。ゼエゼエと肩で息をしている。

「どうだった？」

志村が尋ねた。

「思ったよりも速くない、というより現実味のある動きですね」

ケンが思った事をそのまま口にする。

「だろうな。B，Eといっても所詮は人間だ」

志村はそう言う。「ハッ」と息を吐いて、地面に膝を付いた。そのまま後ろにあった立ち木にもたれかかる。

「大丈夫ですか？」

ケンが尋ねた。

「最近は何く使って無かったからか……。それとも昔に散々使っていたせいか？」

志村は苦笑する。

「ま、とにかくだ。この通りB，Eの力には反動がある。長く使えば使うほどに反動は大きくなり、最悪死ぬ。例えば、一度の使用時間が短くても何度も使っていれば同じようになる」

「まるで危ない薬ですね」

「使いたくなくても使わないといけない場合がある分、こっちのほうがちが悪いかもしれないがな」

そう言って志村は立ち上がる。どうやら体調が落ち着いてきたらしい。

「何となく力がどういふものは分かりました。でも肝心の使い方は？」

ケンが尋ねた。B、Eの力がどういったものは自分の目で見て確かに分かった。しかし、その力の使い方。力はどうやって使うことが出来るかを聞いていない。

志村はそのケンの質問にどう返答するかを考え込む。

「うーん、こればかりは説明し難いな。肉体的にどうこうとかじゃなくて精神的なものなんだよ」

「精神的？」

訳が分からないという表情でケンが言った。

「そうだ。精神の中のスイッチ？　みたいな感じなんだよ」

「はあ……」

その答えにケンは首をかしげる。志村はそんなケンの肩を叩いた。

「ま、自転車みたいなもんだ。自分でコツを掴むこったな」

志村はフツと笑いながら言った。それに対してケンは嘆息する。

結局、力の肝心なところは分からず仕舞で終わったと内心で憤った。

＊

2人が獲物を抱えて村へ戻った時である。

「どうだった？」

村の中年の女がケンに声をかけた。

B，Eである自分を疎ましく思っているはずなのに、珍しいこともあるもんだと思いが抱えていた獲物を降ろしてみせる。

「この通りの上物ですよ」

それを見た中年の女は困惑しながら言う。

「いや、そっちじゃなくて訓練の方」

だろうな、とケンは内心で思った。この人は戦闘で自分が使えるかどうかを見極めようとしているのだろう。でなければ、何の用も無いのに声をかけたりしない。

それは、しばらくこの村で暮らしてみても分かった事だ。

「別に、レーザー銃の使い方を習っただけですよ。B，Eの力の使い方は全く分からないですし……」

ケンは口を尖らせて言ってみせる。

「そう？」

女は疑わしいものを見るような目でケンを見ながら言った。

「その通りです。B，Eの力は簡単に扱えるものじゃない」

そう言ったのは志村だ。

「ケン。食事当番の連中に獲物の事を知らせてきてくれ」

志村はそう言って、ケンからレーザーライフルを預かる。ケンは「分かりました」と頷いて厨房に向けて走って行った。

それを見ながら、今日の食事当番にはユリとミクがいたか、などと埒もないことを考える。

「えっと……」

女が何か言いそうな顔で志村を見た。

「これですよね？」

志村はケンから預かったレーザーライフルを女に渡す。今回の訓練で使ったレーザーライフルは村の共有物だったからだ。当然、忘れずに返さねばならない。

もっとも、この女が心配していたのはそんなことでは無く、B，Eに武器を持たせると何をしでかすか分からないという恐れであった。

当然、志村も女のそんな考えは分かっている。

「ケンはまだ子供です。ちゃんと村の一員として接していけば村のために戦ってくれますよ」

その発言に女は顔をしかめる。

「子供はしっかりと育てないとグレて大変なことになる。ま、大人ならその辺の事は分かっているとは思いますがね？」

その皮肉を込めた志村の一言で女はイラッと不愉快な気分になった。

「分かっているわよ」

思わず声を出す。

「でしょうね」

志村は何てことも無しに言って見せた。その内心では、正論を言ったところで理解してないだろうし、理解しようとしてもしないだろうと軽蔑する。

この村は保守的というのを通り越して閉鎖的であり、他者を絶対に認めないという風潮なのだ。

「ま、戦えるようにするために、もう少し時間をもらいますよ？」

志村はそう言ってその場を立ち去る。その後ろで女が小さく「B、Eが……！」と小さく悪態をついたのが聞こえた。

第九話

「これ、着る必要あるんですか？」

ケンが言う。

「動かないで」

ユリがケンの腰に手を回して言った。そのまま手に持った紐の長さを確認すると、ケンの腰のサイズに合わせて切る。そして、それを結び合わせて完成だ。

「うん、これで良いんじゃないか？」

ユリが頷いて言った。

「うんうん、いいねー」

ミクがケンの姿を見て歓声を上げる。その横で志村苦笑した。

「やれやれ……」

そう言ってケンは嘆息する。彼はユリとミクの手で、T、Tとの戦闘の為に作られた鎧を着せられていたのだ。

鎧と言っても、倒したT、Tから剥ぎ取った装甲を紐やら何やらで繋ぎ合わせたハンドメイドの物に過ぎず、体を覆う部位も胸と背中の一部に両肩、膝下の脛の辺りのみという簡素な物だった。

しかも、色は白を基調としたものであり、オリーブやカーキ系の色のタクティカルジャケットを着ているミクやユリと並ぶと明らかに浮いているのだ。

「この鎧に何の意味が……」

ケンが呟く。

「正直、あまり意味は無いな」

そう言ったのは志村だ。

「元が倒したT、Tの装甲だけにレーザーは普通に貫通するからな」

それを聞いたケンが不満そうな顔をする。そんな意味も無い物の為に今までの時間を費やしたのかと思えば腹が立った。

「でも、何か爆発した際に飛んでくる破片とかからは身を守れるぞ」
ユリが鎧を身に纏ったケンを見ながら言った。

「爆発って……」

「たまにね、T，Tを倒したときとかに当たり所が悪いとあるんだよ」

一体何が爆発するのだという疑問に思いながらも、意味の無い鎧を着せられた事に呆れたケンにユリが言う。

「事故死は防げるよねー」

後に続いてミクも同意する。2人は顔を合わせると一仕事をしたという満足そうな顔をして、もう一度ケンを見た。

「ま、2人の趣味みたいなもんだな。女ってのは幾つになっても着せ替え人形が好きなんだろうさ」

「あ、酷い言い方」

志村が苦笑して、ミクがその事に口を尖らせて非難する。リはその2人を見て、その恋人同士特有の雰囲気羨ましく思う。

「ま、とにかくだ。今日は初陣なんだろう？ せいぜい死なないようにするんだな」

志村が言った。

そうなのだ。今日はケンが初めて廃墟の探索に出る日なのである。彼はこの日の為に何度か鹿狩りを兼ねた訓練を行い、ある程度は銃器の使い方を覚えたということで今回の探索に参加することになったのだ。

ただ、相変わらずB，E特有の力の引き出し方は分からないままであったが……。

「古今東西、完全な状態で始まる事は存在しないさ」
と、志村は言ったものである。

「あの、そろそろ時間なんですが……」

はしゃいでいる2人に眼鏡の少女が声をかけた。吉岡真帆である。ハンドメイドのタクティカルジャケットを着て、その手にはレーザーライフルを抱えていた。

彼女は今回の探索班の1人であり、同じ探索班であるケン、ミク、ユリの3人を呼びに来たのである。

「ねえ、見て見て！ ケンちゃんの鎧、格好いいでしょ？」

ユリが吉岡に屈託のない笑顔で尋ねた。

吉岡はケンを一瞥する。その時、たまたまケンと眼が合った。ケ
ンが軽く会釈して、吉岡もそれに返答するように軽く会釈を返す。

「別に……、いいんじゃないですか？」

吉岡は全く興味無いといった声で答えた。

「えー、反応薄いよー？」

ユリが不満気に言う。それを見て吉岡は嘆息しながら、内心で戦
闘前に何を呑気な事をしているのやらと呆れる。

「そんなことより早く準備してください」

吉岡は少し語気を荒げて言うと、そのままプイと背を向けて村の
門に向かって入った。

そんな吉岡を見て、志村とユリが顔を見合わせる。

「マホちゃん、やっぱりB，Eが苦手なんだね」

「みたいだな」

吉岡真帆。彼女もまた、かつてB，Eに被害を被った1人であり、
この村の多くの住人と同じようにB，Eの事を嫌っていたのだ。

「彼女はB，Eに酷い目に合わされたんだろ？ 無理も無いよ」

ミクが2人に視線を向けて言った。

「別に……、嫌われるのは慣れてますよ」

ケンが口の端を歪めて言うと、何を今更と嘲笑する。

似たような事は今まで何度もあったのだ。このギジの世界どころ
か、外の世界にいた時でさえ。

どこの世界へ行っても人間というのは自分たちとは違う存在を認
められないらしい。

ケンはそう思うと、一々そんな連中に合わせてやるのも馬鹿みた
いだと改めて思い直す。

ならば、この村にいつまでもいるのは自分の精神衛生上も、この

村にとってもあまり良いことではないという結論に至った。

「ある程度、力が付いたらこの村を出よう」

ケン は漠然とそんなことを思い、誰にも聞こえないように呟く。

＊

それから4人は村を出て1時間ほど歩いて、探索予定地である廃墟にたどり着いた。

そこはかつてケンがギジの世界に飛ばされてきたな書であり、ミクとユリの2人に初めて出会った場所でもある。

以前はT、Tに襲われ、大変な目にあったが今回はそうはいかないと意気込んで、ケンはレーザーライフルを構えてみた。

「そんなに構えなくてもいい。今回は適当にウロウロして帰っても構わないんだ」

ユリがケンの肩を叩いて言った。

「ケンちゃんは初めてだしねー。私たちの後ろで眺めてるだけで良いよ」

今度はミクがクスクス笑いながら言う。

もうここは廃墟の中でT、Tのテリトリーだ。何時、何処から敵が襲ってくるか分からないのである。その為、ケンは緊張していたのだが、ユリとミクの2人は和やかであった。

吉岡は和やかではないが、無関心そうに辺りを見回しており、やはり緊張はしていないようにケンには見える。

「あれ」

吉岡が急に声をあげて指を差した。

「敵？」

ケンは吉岡が指差した方向にレーザーライフルを構えなおす。ユリとミクもその方向を見る。

そこには敵では無く、1台の軽自動車があるだけだった。

「あれ、前来たときには無かった……」

吉岡が静かに言った。

「人影は無いな……。車だけ飛ばされてきたのか？」

ユリはレーザーライフルを構えて軽自動車に近づく。

「そんな事があるんですか？」

ケンは何だかであるが、軽自動車に近づくユリの周りに敵がいな
いかを確認しながら尋ねた。

「たまーに、ね。人が飛ばされてくるくらいだから、それ以外の物
だってねえ……」

ミクが返答する。

ユリが手信号で合図をした。どうやら人は乗っていなかったよう
だ。そして、周りにT、Tの姿も見当たらない。

3人はホッと胸を撫で下ろした。

「ポリタンクがあれば、ガソリンだけ抜き取ったのにねー」

ミクが心底残念そうに言った。

「仕方ないですよ。今度また取りに来ましょう」

軽自動車の状態を確認しながら吉岡が答える。

「そうだな」とユリが言いながら何気なく辺りを見回した時だ。

ユリの視界に、建物の陰から人型をした“何か”が姿を現すのが
入った。

それがT、Tであると判断する前にユリはレーザーライフルを構
え、人型に狙いを付けて引き金を引く。

「敵だ！」

ユリが叫んだのと、ライフルから発射されたレーザーが人型……。、
つまりはT、Tに当たったのは同時だった。

ミクと吉岡はユリがライフルを構えたと同時に、そのことに気付
き、同じようにライフルを構えて敵を確認していた。

ケンはユリが叫び終わったのと同時に敵に気付いたので反応が遅
れる。

「数は5！」

吉岡が叫んでライフルを撃ちながら右側の廃ビルの中へ姿を隠す。ユリとミクは吉岡とは反対の左側の雑居ビルであったであろう建物の影に隠れる。

T，Tもユリたちに気付いてレーザーライフルを撃ってきた。

「うわっち！」

ケンはずいぶん動きに着いて来れずにいたので、危うくT，Tが撃ったレーザーに当たりそうになる。

自分の左腕のすぐ側をレーザーが掠め、その熱を感じながらケンはこのままじゃやられると、レーザーライフルをT，Tの方向に滅茶苦茶に撃った。

「バカ！ 何しているの！」

吉岡が叫んでビルの陰に体を隠しながらライフルを撃つ。

「うわったたた！」

ケンは言葉にならない声をあげながら、尚もライフルを撃ち続けながら吉岡のいるビルへ飛び込んだ。

建物の中に入り、レーザーに晒されなくなった事で安堵する。

「助かった……」

それを確認した吉岡がライフルを撃ちながらチツと舌打ちをした。

「あ、すいません！」

ケンはそう言うと、吉岡を倣って建物の影からT，Tを撃とうと構える。

「遅いよ……！」

吉岡がライフルを降ろして言った。火花を散らしながら、膝から崩れ落ちるように倒れるT，Tが見えて「ありゃ」と思わず声を出す。

「すいません……」

ケンは吉岡に謝る。

吉岡はため息を吐くとケンを一瞥した。

「いや、初めてならあんなもんだろう」

ユリが吉岡たちに近づきながら言う。吉岡は「そうですね」とそつぽを向いた。彼女がかけている眼鏡のせいでその表情は伺えない。もっとも、声の調子でおこっているのは間違いないだろう。

「ユリちゃんは初めての戦闘の時、情けない声をあげて腰を抜かして何も出来なかったもんねー？」

ミクが間の抜けた声で言った。

「し、仕方ないだろ！」

ユリが顔を赤面させて声をあげる。

そんな2人を見て、ケンは自分が氣を使われていると思った。

何故、もっと早く反応出来なかったのだろうか？ 何故、もっと冷静に判断できなかったのだろうか？ ケンは自分を情けなく思っ歯噛みする。

「さあ、もう少し奥のほうも見てみようか？」

ミクが言った。吉岡とユリが頷く。

ケンも頷き、今度こそヘマはしないとってライフルを強く握った。

第十話

先程の戦闘からケンの心臓は早鐘を打つように脈打っている。正確には村を出た時点からそうであったのだが、ユリとミクというよく見知った2人の他愛の会話でごまかしてきたのだ。

そして初の実戦。ケンは軽いパニックに陥って冷静な判断が出来なかった。

普通の人間ならば当然のことである。ある程度の覚悟や予備知識があったとはいえ、いつ死んでもおかしくない状況に初めて立ったのだ。そこで正常な判断を行うのは困難であろう。

ケンもそのことを分かつてはいたが、それでも悔しかった。

「次こそは……！」

そんな事を考えながら3人の後に着いていく。

そして15分ほど進んだ時だ。ミクが急に立ち止まりキョロキョロとあたりを見回す。

「この辺りで2手に別れようか」

ミクが言った。

「え？ 別れて大丈夫なんですか？」

急に別れて行動しようと言い出したミクに驚いてケンが尋ねた。

「うん、大丈夫だと思う。今日はT、Tの数も少ないしね」

ミクが頷いて答える。

確かに先程の戦闘から今までT、Tは影も形も見えなかった。

「普段なら今日よりも敵の数も多いし、戦闘も激しいからな」

ユリがそう説明する。

「そうなんですか？」

それを聞いてケンはまたしても驚いた。これはつまり、3人はもっと激しい戦闘を普段からしていることになる。

彼女らにとっては楽な戦闘なのにも関わらず、自分はいっぱいっばいだった訳だ。ならば、もっと俺は強くないといけない。

でなければ、あの村から出て行くことなんて到底出来るわけがない。ケンはその思っただけのグリップを強く握った。

「とりあえずは……」

そんなケンをよそにミクが4人をどう分けるかを考える。

それを見たケンはそっちの方に意識が向いて、できればミクかユリと一緒に良いと思った。

あの吉岡真帆という人物は仏頂面な上にB、Eを嫌っているらしいので、どうにも苦手なのだ。

だが、世の中というのはどういった訳か自分の求めているように物事が進まないようになっていく。それは、どの世界でも同じらしく……。

「じゃあケンちゃんとマホちゃんに、私とユリちゃんの組み合わせで！」

ミクが能天気に行った。ケンは何となくそうなるのではないかと思っていた事が予想通りになり、ため息をつく。まったくもって嫌な事ばかりが思い通りになるものだと思ったからだ。

ケンは吉岡を一瞥する。吉岡も同じようにケンを一瞥した後、ユリに一言「分かりました」とだけ言った。

そして、ミクとユリ、吉岡とケンの2組に分かれて別行動を取るようになった。

ケンは並んで歩いていくミクとユリの後姿、そのユリの背中半分あたりまで伸びている後ろ髪を恨めしそうな顔をして眺める。

揺れる後ろ髪を見送りながら、前にも似たようなことがあった事をケンは思い出した。

自分の望む結果にならないというのは分かっているのだが、もしかすると自分の望む結果になるのではないかと少し期待を試みるが、やはり期待は外れて望む結果にはならなかったという事である。この場合、自分の期待は裏切られることになるのだが、元々そうなることは予想が付いたので、そこまでショックは受けないのだ。

分かりやすい例えで言うなら、暇な休日に友人から遊びの誘いが

来ないかと期待するのだが、こっちから友人にアクションを起こしていた訳ではないので特に連絡はないだろうという予想をする。

しかし、前述した通りに、もしかしたら誘いの連絡が来るのでは若干の期待をするのだが、特に何の連絡も無いので結局1人で休日を過ごしてしまうといったところである。

そしてこう思うのだ。

「あーあ、やっぱりな」

ケンはその事を考えた。

「私たちも行くよ」

吉岡の言葉でケンは我に返る。そんなケンの顔を見て吉岡は歩き出す。

そしてケンは吉岡の背中を追いかけることにした。

「君って分かりやすい性格をしてるって言われない？」

歩きながら吉岡が尋ねた。その突然の質問にケンは一瞬、自分が何を聞かれたか分からずに「はい？」と聞き返す。

吉岡は相変わらずの仏頂面で「分からないのなら良い」とだけ言っ
て歩く速度を速めた。

＊

それからケンと吉岡の2人は手当たり次第に廃墟の建物に入っては中の探索を行う。しかし、ガラクタの1つも見つからず、空っぽの建物を見て回るだけの行動にケンはいよいよ飽きてきた。

「何も見つかりませんね。この探索って何か意味があるんですか？」

何も無い広い部屋の中、ケンは足元に落ちていた石ころを蹴飛ばしながら言った。

「その意味の無さそうな探索でユリさんに拾われたのは君じゃなかった？」

ムツとした表情で吉岡は嫌味っぽく答える。しかし、それは事実であり、ユリたちがこの意味があるかどうか分からない探索をしなければケンは今頃死んでいたかもしれないのだ。

「そりゃそうなんですけどね……」

いい加減に飽きてきたとケンは吉岡に目で訴える。勿論、吉岡もそのことは承知していたが全く気に留めることなく振舞っていた。

さっさと帰りたいと思い、ケンは外に視線を向ける。

すると、そこにはT、Tが闊歩している姿が見えた。ケンは即座に反応してライフルを構える。

T、Tがケンに気付いたのはそれと同時だ。T、Tが手に持ったレーザーライフルを構える前に、ケンは自身のライフルのトリガーを引く。

ケンのライフルから放たれたレーザーはT、Tの胴体を焼いた。しかし、それでもなおT、Tは動こうとし、ケンはそのままトリガーを引き続けて、2発、3発とレーザーを打ち続ける。4発目にはレーザーの弾道を確認する為の目視可能な曳光用レーザーが発射された。

「さっさと倒れろ！」

ケンが声を出す。

レーザーが当たるごとにT、Tは仰け反り、ケンが2回目の曳光レーザーを視認した辺りでT、Tはようやく倒れた。

「援護してくれても良いんじゃないですか？」

ケンは振り向いて、後ろでライフルを構えていた吉岡に言った。

「私がライフルを取って構えたときには君が倒してたわ」

吉岡が答える。

T、Tを発見、射撃、撃破までの時間はケンにとってはかなり長く感じたが、実際のところは3秒か4秒くらいの出来事だったのだ。

「来るよ！」

吉岡が叫ぶ。

先程の戦闘を聞きつけたのか、複数のT、Tがどこからともなく

走ってくる。その動きは人間のようにであり、機械にはとても見えな
い滑らかな動きだった。

「こいつら！」

ケンは再びライフルのトリガーを引く。周りには体を隠せるよう
な物が一切無く、それがケンを恐怖させた。

「伏せて！」

次に叫んだのは吉岡だ。

ケンはそれを聞き、ライフルのトリガーを引いたまま膝を折って
体勢を低くする。

集まったT，Tの中心に握りこぶし程の何かが落ちるのが見えた。
それは所謂手榴弾である。

光ったと思った次の瞬間には爆発が起きてT，T達を吹き飛ばし
た。

「ぐえ！」

爆発の熱に当てられて、ケンは潰れた蛙のような声を出した。何
かの破片が自分の着ている鎧に当たってカンカンという音を立てる。
熱が収まり、ケンが顔をあげると吹き飛んだT，Tの破片が散ら
ばっていた。ホッと胸を撫で下ろす。

「なんとかなったみたいね……」

吉岡が呟く。

「ですね」

ケンは自分の足元に腕が転がってるのを見つけた。

その手にはケンが持っているライフルを半分にしたようなサイズ
のライフルの様な物が握られている。

ケンはそれを拾い上げる。

「マシンガン……。私たちが使ってるライフルよりも小さくて連射
が効くタイプね。バッテリーの消費が悪くて射程が短いから使う人
は少ないけど……」

吉岡が説明した。

「戦利品、ですね」

そう言ってケンはマシンガンを構えて見る。どこも壊れている様子は無く、普通に使うことが出来そうだ。

「そのマシンガンが今回の収獲かしら？」

吉岡はケンの拾ったもの以外に使えそうなものが落ちていないことを確認して言った。

「このサイズだと正確にはサブマシンガンですよ」

ケンが言った。

マシンガンといっても様々な種類があるのだ。1人から2人で運用するような物や、三脚等に固定して陣地防衛などに使われる物、そしてケンが拾った携行用の物である。

ケンが拾ったタイプのマシンガンは所謂サブマシンガンもしくは短機関銃と呼ばれるものだ。

もつとも、いちいちそんなことを知っている人間はそうはいないし、ライフルもマシンガンも同じように弾が連射される銃であるので知らない人からすればどっちも同じ様なものだろう。

大体、レーザーサブマシンガンなんて語呂も悪いし長すぎる。その為か、この世界では単純にマシンガンと呼ばれているのだ。

「どっちでもいいわ」

吉岡が言った。彼女もまた知らない側の人間なのだ。

「マホちゃん、ケンちゃん！」

ミクがそう叫んで飛び込んでくるように走ってきた。その横にはユリもいる。

どうやら先程の戦闘の騒ぎを聞きつけてきたらしい。ケンはそれを見て、来るのが遅いと内心で悪態をつく。

「大丈夫だったか？」

ユリが尋ねた。

「見ての通りですよ。どこも怪我は無いでしょう？」

ケンは両手を広げて言ってみせる。確かに怪我をしている様子は無く、ケンが着ている白い鎧も綺麗なものだ。

「そう、か……。良かった」

ユリは安堵して胸を撫で下ろす。

「佐原君、その1体は君が撃破したよ」

吉岡がバラバラになったT、Tの1体を指差して言った。

「おー、初撃破だねー」

ミクがおどけて言う。この時になってケンは初めて自分の手でT、Tを倒したことに気付く。

「そうか……」

先程の戦闘はケンが1体のT、Tを倒したことから始まった。そして、その撃破した1体は、誰の手も借りずに自分の手で倒したのである。

初めてT、Tと出会ったときは散々に追い回されたことや、さらに前の戦闘で半ばパニックになっていたことを考えると、これはすごい進歩ではないだろうかとケンは思った。

「出来るじゃないか、俺だって……」

それはケンに1つの確信のような、自信にも近い手応えになった。「ところで、それは？」

ユリがケンの持っているレーザーマシンガンを見て尋ねる。

「これ？ 戦利品ですよ」

ケンは誇らしげに言って、手に持ったそれを掲げて見せた。

それを見てユリは戦利品とは大した事を言うと、内心で笑う。

そして、敵を倒して自分の強さに自信を持つのは良いが、それが悪い方へ進んだりはいしないだろうかと心配もする。

「ああ、だからキョウは……」

ケンが自信を持った余りに暴走しても止めることが出来るように、志村はケンにB、Eの力の使い方を曖昧にしか教えなかったのではないだろうか？

そんな事をミクは考える。勿論、実際にそうなのかは分からないが……。

「どうかしたんですか？」

吉岡が尋ねた。どうやら、いつものニコニコ顔で無くなってたよ

うだ。ミクはそれに気付いて吉岡に笑ってみせる。

「ケンちゃん、まるで子供だと思わない？」

「はあ……」

吉岡はミクにそう言われてケンを見た。ユリに先の戦闘の様子を興奮しながら話している姿は確かに子供のそれだった。

「同じB，Eなのに……」

吉岡は村にいたB，Eの男を思い出して、ケンと比べながら言う。どう見ても彼は子供であり、村に危害を加えるようには見えなかった。

「あの子はB，Eである以前に私たちと同じ人間だよ？　だったら仲良くすれば村に危害を加えるようにはならないと思うな」

ミクが言った。

「でも、分かりませんよ。力がある人間って……」

吉岡そう言って、ユリにレーザーマシンガンのことを説明しているケンから眼を逸らした。

「だから！　そうならないように私たちで面倒見てあげないと。良い事したら褒めて、悪いことをしたら叱る。子育ての常識だよ？」

ミクがそう言ってフンと笑う。

「私たちは母親じゃないんですが……」

吉岡はおどけるミクに呆れながら答えた。この人はどこまでが本心で、どこまでが冗談か分からないところがあると改めて思う。

「さて、そろそろ村に帰ろうか？」

ミクが3人に問いかける。時間的にも体力的にもここが引き時と判断したからだ。それにケンの初陣であることも加えれば妥当なところだろう。

「これ、俺が使っても良いですか？」

ケンがミクに尋ねる。どうやら先程の戦利品を自分の物として使いたいようだ。

「さあ、どうかな？　それは村に戻ってからだね」

ミクの答えを聞いてケンはムウと顔をしかめた。武器の所持は村

の許可を得なければならぬのだ。

「私からも言ってみるわ」

そう言ったのは吉岡である。初めてケンに対して好意的な発言をしたのだ。

「本当ですか！」

ケンはそう言って、頷く吉岡を見た後に「やった」と小さくガッツポーズをする。

それを見た3人は顔を見合わせて、やはり彼は子供だなとお互いに苦笑した。

第十一話

ケンが初陣を終えた日の夜の事である。

志村とミクに与えられた住居の中、蠟燭の光だけが明かりとなっている部屋で2人は向かい合って話していた。

「で？ 結局どうだったんだ？」

志村がミクに尋ねる。

「普通だったよ。1体倒して、マホちゃんがフォローしてお終い」
蠟燭の火が揺れて部屋の陰影が変わると、志村は隙間風かと視線だけを左右に動かした。

「その扉、たてつけ悪いんだよね」

そんな志村を見たミクが先程の説明に付け足して言った。それに對して志村は「ふん」と相槌を打つ。

「まあ、そんなもんだろうな。B，Eの力を発動させることも無かったようだしな」

志村はミクに視線を戻す。

「それなんだけど……」

ミクが声を落とし、その様子を見た志村が眉をピクリと動かした。
「ケンちゃんに力の使い方を教えなかった理由って、やっぱりケンちゃんが力を身に付けることで暴走したりするのを防ぐため？」

「暴走？」

「うん。B，Eの力を使ってこの村を滅茶苦茶にするとか」

よくもそんな推察をするものだ、と、志村はミクの言葉に感心する。
ただ、少し邪推すぎるのではとも思う。

しかし、確かにミクの言う通りであり、志村はケンがB，Eの力を持つことでこの村に何か危害を加える事を懸念していたのだ。

だから志村はミクの言葉を否定しない。

「確かに、スパルタで教えれば3日でB，Eの力を使えるようになることはできるさ。お前の言うことは半分正解だ」

「半分？」

半分正解と言った事にミクは疑問を抱く。立て付けが悪い扉の隙間風で蝋燭の火が揺れた。

「そうだ」

「じゃあ残りの半分は？」

「まあ、何度も戦闘をやってるお前なら分かるだろうが、戦闘にはその時に応じた立ち回りってのがあろう？」

戦闘時の立ち回り……。敵との距離のとり方や、武器の射程、障害物を活かした戦略、攻撃のタイミングなどである。

「そういうのは口説明や訓練なんかで身につくもんじゃない」

「確かにね」

戦闘というのは頭で考えて行うものではなく脊髄反射的に行うものである。つまり、それは体で覚えるものであり、実際に何度も戦闘をこなしていく上で身に付くのだ。

「これを身に付けないうちにB，Eの力の使い方を教えるのはどうかと思ってな」

つまりは基礎と応用である。戦闘での立ち回りを基礎とするなら、B，Eの力は応用だ。

人間というのは、どんな物事でも基礎が出来なければ応用は出来ない。例えばケンがB，Eの力を身に付けたとしても戦闘の立ち回りが全く身に付いていなければ、その力を戦闘で活かすことは不可能だろう。

ちなみに、これは現実社会でも同じ事である。

とある小売業で、利益を伸ばすための企画を行うならば、自分の頭だけで考えるのではなく、小売の基本となる店舗の現場を見るべきだろう。

そして、現場の作業を行い、客層などを見ることで小売のリアルを知ってから企画を立ち上げるべきなのだ。

小売業を動かしているのは管理職ではなく現場の人間なのである。勿論、これは小売だけでなく世の中全体に言える事なのだが。

「それが残りの半分？」

ミクが尋ねた。

「まあ、そんなところだ。基本も何も無いうちに力を身に付けたら、ケンとは戦闘の際に力に依存した戦い方をするだろうな」

「それは……、まずいね」

「だろう？」

そう言って志村は自分の右腕に視線を落とした。その腕にはうっすらとだが、B、Eの力を発動したときに現れる機械回路の様な模様が見える。

それは過去に力を何度も使った証拠でもあった。

「B、Eの力の反動は大きい。何度も使っていれば死に至る」

眺めていた右腕を掴まれる。

「大丈夫。キョウはもう戦わなくてもいいんだよ」

志村の腕を掴んだままでミクが言う。

「どうかな？ 片手でも力を使えば、普通の人間以上にはまだ戦えるつもりなんだが？」

志村は掴まれていた腕を振って、ミクの手を払いのけると皮肉っぽく笑いながら言った。

「それは……！」

ミクが動揺した顔を見せる。志村はそれを見て、ミクのこんな顔を見たのは久しぶりだと思った。

「安心しろ。そんな事にはならんよ。今はケンの奴もいるしな」

それを聞いたミクがホッと息をつく。

しかし、志村としては自分より若い人間であるケンと戦わせて自分は村に残るということに憤りを感じていた。

だが、そう思ったところで片腕だけの自分では戦力にはなれない。B、Eの力を使えばそんなことは無いが、体が持つかどうか自分からないし、そもそもB、Eを毛嫌いしている村である。B、Eの自分がここでまた戦えば、自分と、何よりもミクの村における立場が危うくなる。

せめて片腕が残っていれば、ミクと村を出て行くことも出来ただろう。

そう思うと、志村は今の自分を情けなく思い、内心で齒噛みするしかなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6076v/>

世の道理に気付いたのは異世界の中だった

2011年10月10日03時18分発行